

あそ 2

2023



寄稿

亀田虎童子

春雷に水あらたまる山上湖
手賀沼へ走り込みたる蛙火かな
夕刊の来てから暮るる辛夷かな
仏壇をのぞいてをりしうかれ猫
逃げるたび翹つよくなる雀の子

句集『百里』より

二月集

ばかりなり

佐藤 竹僊

帚草あとは雪待つばかりなり

元日の前の日何を食べたっけ

老といふ便利な道具着ぶくれて

椋鳥の下を通って夕支度

ふるさとは桃園川の蓋のうへ

ポット空け春の硯を持ちかへる

おほひなる膝頭あり古都の春

舟着場と舟との隙間春きざす

龜鳴けり東海林太郎のやうに立ち

髪の毛をととのへるとて春の水



雑詠

森なほ子

冬至過ぐ夕映えに透く松の枝
夕月はピンクゴールド降誕祭
サンタ折る赤い折り紙小さき指
折り紙のサンタクロースに目鼻描く
壁登るサンタ人形盗賊めく
ポインセチア一掃されてシクラメン
ミサイルのごと筆柿を立てて置く
オーロラを見てきし人の冬帽子



年の瀬

赤座典子

干蒲団屈託も無くふくふくと
冬茜切り絵の貨車の浮かびける
霜柱はらり傾き花蕊めき
冬枯の皇帝ダリア孤高なり
眼鏡のゆがみ直す些細な年用意
子の歳暮プーさん飛び出すカレンダー
風呂吹やこの温もりを届けたし



「丁寧な説明」の無き去年今年

十二月

秋川泉

寒風や前こごみして前こごみ
参詣の列長々とおかめ市
十二月嘴広鶴にゆらぎなし
野良猫に軒端をどうぞ冬の雨
あららら猫と目の合ふ日暮かな
棟上やクレール長く小春風
冬夕焼異世界の道現れる
冬の夜や千年灸のしみわたる



室の花

七郎衛門吉保

山茶花やさんざ散り落ちまた咲けり
防衛費一から二へと冬蚊落つ
百貨店閉店続き雪椿
デパートの巨大聖樹の虚飾かな
冬に入る棚に溢るる色長靴
巻機山新雪一重に身繕ひ
十二月紅茶を汲める抹茶碗
荒れ模様の予報和らぎ室の花



十二月

篠田純子

吾を招くばせうの破葉十二月

竹箒短く持ちて十二月

イヴの夜サンタ「セコム」とすれ違ふ

AI^{チアイ}音声のニュース淡々十二月

福岡より「うれしか」電話十二月

里芋の皮剥き残る母の汁

満場総立ちスケーター―凜とカーテシー

まぼろし

篠田大佳

しぐるるやバスのまぼろし見て奔る

静寂の濡れる地下鉄日短し

連結のお化けに魅いる稚児の冬

語り合ふ旅の親子や年の暮

映研の捉へし笑顔冬の浜

椰子の木にうつすら雪の積もりけり

西行の筆跡^ふちぢこまる寒さかな

筆洗の紺の流れて冬銀河



年の末

須賀敏子

伯爵といふ名の冬至南瓜かな
実千両隣は独り住まひなり
芦ノ湖の富士が見えたり冬麗
高層の灯の少なさや年の末
葱刻む役は夫に譲りけり
柚子湯して带状疱疹癒えにけり
『エキバン』で固めし小さき輝ひとつ
つきたての餅を丸める夢の中



雑詠

都築繁子

银杏散る雨の広場の静もりぬ
冬紅葉夕陽を入れて輝けり
所在なきベンチがひとつ冬紅葉
枯葉舞ふ工事現場の回り道
まなかいに聖樹ゆっくりバスを待つ
引き出しの整理もひとつ年用意
父母よりも命ながらへ松飾り



極月

長崎 桂子

今朝の雨枯葉ささやく別れかな

極月や朱鷺色の庭草の花

極月の習慣を成す八十代

師走満月良識の指導者たれ

朝夕の寒さ沁む日差しまち居る

柚子浮かべ思ひを馳せる旅心

朝吹雪今年最後のごみ収集

黒雲へ太陽切り込む年の暮



十二月号作品より

篠田純子・篠田大佳・佐藤喜孝

絶筆は明日か牡丹雪降る日かな

亀田虎童子

冬も去り大気も温かくなつたかと思ふ高空で雪の粒が手をつなぎ大粒の雪となる。牡丹雪である。ぼた雪、花びら雪ともいふ。掲句、「牡丹雪」とあるが「ぼたゆき」と読むと調べがよいが、「ぼたゆき」では情緒がなくなる。

万人に絶筆の時が来る。「願はくは花の下にて春死なむ その如月の望月のころ 西行」は人口に膾炙してゐるが絶筆ではない。これが絶筆だと作者自身は自覚して作句することはないであらう。虎童子さんは深く牡丹雪に思ひがおありのやうだ。

私なら何時が好きかと想像してみた。思ひついたので「風花」。浄瑠璃寺で出会った風花、あの中が今はいちばんあくがれてゐる私がある。(喜孝)

東西線 南北線 の 師走かな

亀田虎童子

東西線や南北線という路線は、全国に複数存在する路線です。簡単に調べたところ、多くは都市の地下鉄に命名されている路線です。おそらく、読者各々の想像する「東西線」「南北線」は、賑やかで人の多い路線であると思われまます。都市の縦横を走り回っている地下鉄と師走のイメージ

ジは重なり、鉄道の車内の賑やかさが想像されます。(大佳)

なまぐさきもの白鳥の喉とほる

亀田虎童子

瓢湖で見た白鳥は、真つ白ではなくグレーに見える鳥も居りました。個体数があまりにも多く、鳴き声も騒々しく、生命力を感じたものの、美しいとは思われませんでした。掲句の白鳥は長い首を突き上げ、蛙か泥鰌か、普段とは違う餌を飲み込んでいます。エロティックで美しい白鳥が見えてきました。(純子)

原發に原爆がくる地下に蟬

佐藤竹僊

国内では、有事の際に原子力発電所が狙われるという議論があります。人間の世に危機感や焦燥感が漂っている中で、蟬は地中において、目の前の生存に必死になっています。地表に出るのを待っている蟬は、新たな命が生まれる比喩とも読めます。(大佳)

だうしても踏切がある母の家

佐藤竹僊

作者の記憶の中の母上の実家は、臍のなかにあります。思い出そうとしても、踏切の閉まる「カンカン」の音しかよみがえりません。踏切の路線は国鉄だったのでしょうか。(純子)

天を指す娘の指に赤とんぼ

都築繁子

おそらくは年の幼いお嬢さんが天を指さしている。それは、周辺五メートルのことに囚われがちな大人の世界意識を空へ広げてくれます。「赤とんぼ」について、他の作品を読んでいると、異界と現世を繋ぐ道標としての意味が含まれているように思います。そこに、人間と異界の境界に立つお嬢さんの神秘性も感じます。(大佳)

どんぐりの飛んで転げて広き空

都築繁子

童話のやうな世界。繁子さんはどんぐりになって句を詠まれてゐる。どんぐりはただ落ちたのではない。飛びたくてとんだのだ。転げて落ちついたところが広い空が見える。どんぐりは見事仰向けになり良きところにとどまったやうだ。(喜孝)

庭点る輪唱を為す夜の虫

長崎桂子

家にある庭園灯が灯り出したら、虫があちこちに鳴き始める。そんな光景を想像しました。虫だけが夜に満ちている安らかな家の中を想像すると、秋の夜を楽しむ心のゆとりを作者から感じられます。(大佳)

秋桜群れゆるるひたむきに有りたき

長崎桂子

秋桜はいつ見ても揺れてゐる印象である。その揺れやうが“ひたむき”と作者は感じられ自己の矜持のやうだとおもはれた。人生、一本筋を通し歩んでゐる作者がこの句からうかがへる。(喜孝)

草風くっ付けしまま月曜日

森なほ子

「月曜日」の省略が見事です。土曜日や日曜日に、草風がくつつくような自然の多い場所に散策に出掛けたことが想像されます。平日になって、ふと衣服の違和感に気づいたことで、散策の記憶が思い出され、平日の始まる月曜日の憂鬱さもより強く詠まれています。(大佳)

河原辺に小さきコスモスはぐれ咲く

森なほ子

河原にコスモスの群落を見つけた。なほ子さんはそのコスモスの群落より、すこし離れたところに何本か咲いてゐるコスモスに惹かれた。“はぐれ”でこのコスモスたちへのおもひが読者に伝はってくる。擬人化におもひを託された一句。(喜孝)

手作りの固き干柿秋澄める

赤座典子

今、工場で大量に作れるものを敢えて手作りで作るということは、不安定的で失敗もあるけれども、充足感を得られます。工場のものより少し固い干柿も、愛着のあるものとなっていることが伝わってきます。なんでも機械に任せる時代だからこそ、こうした感覚を持ち続けていきたいです。(大佳)

爪切りて終る一日冬隣

赤座典子

子育ても終り夫婦二人だけの日々。意識しないとどんどん流れて行ってしまふ毎日。けふは爪の手入れをしたただけだあと振りかへる冬隣の一日。わずかな物足りなさをともなつて…。(喜孝)

神主に飛蝗のとまる地鎮祭

秋川 泉

地鎮祭を行なっている土地にバツタが飛んでいて、偶然神主に止まる。おかしい場面であるけど、笑いを堪えなければいけないという葛藤があります。地鎮祭の時に神主さんが着る衣は格衣(かくえ)というらしいですが、格衣の色がたまたまバツタと似ていたら、衣と同化して余計おかしいかもしれません。(大佳)

山の湯やあまたの星の流れ入る

秋川 泉

ただただ美しいばかりの一句である。このやうな場に遭遇することは奇跡であり人生の余徳である。この句に至る来し方あればこそである。このことを表面ではいはぬがしっかり書き留めてゐる。(喜孝)

老いた手も構はず止まる蜻蛉かな

七郎衛門吉保

蜻蛉から見て、人間の老若は咄嗟に判断できるのでしょうか。ふと、そういう疑問を持ちました。

日本では、益虫として蜻蛉に対して人間は敵意がないようで、蜻蛉の方も安心して居るのかもしれませんが。蜻蛉との共生を喜んでいる作者の姿を想像しました。(大佳)

集まって走って食べて運動会

七郎衛門吉保

律動的で楽しい作品。“集まる、走る、食べる”とこれらの動詞から何を想像でき得るであらうか。私の体験した昭和20年代の小学校の運動会の記憶といへば、運動の種目よりランチタイムにある。母の手作りのお弁当を校庭で広げ、母や弟たちと一緒に食べた。普段食卓に上らぬ(きつと見栄があつたのだらう)ものが重箱に入つてゐた。

このやうな運動会を私に蘇らせてくれた一句である。動詞の使ひ方が的確な佳句。(喜孝)

楽の音 冴ゆ巫女舞の裳の嫺やかに

篠田純子

寒い時分の神社のお祭りのようです。巫女舞は、人神一体を表現する巫女の踊りとのこと。巫女の表現する、人と神を結びつける言語の印象は「嫺やか」であり、巫女の指先の動く瞬間まで追いかけていて、繊細です。伴奏も寒い気候に沿つて冴え冴えと響いています。(大佳)

こぼるるもとどまるも紫式部の実

篠田純子

破調の句。この破調・字余り“こぼるるもとどまるも”、そして“も”の繰り返しがこの句に余情を与へてゐる。神秘的な紫式部の実の色に魅惑されて詠まれた一句。(喜孝)

宵闇や一等星しか知らぬ街

篠田大佳

「引けは九つ何故それを 四つと云ふたか吉原は 拍子木までが嘘をつく」久保田万太郎作詞の長唄「みやこ風流」の一節である。今の盛場で不夜城と言えば、新宿歌舞伎町でしょうか。月光も、星の瞬きも、パワー全開のネオンに負けています。(純子)

秋暮れていま永遠の雨の中

篠田大佳

雨を詠むに“永遠の雨の中”と形容された。喜怒哀楽を突き抜けた不思議なものが表現されてゐる。大佳さんの句の中に特別な時間が流れてゐる句をみかける。高島茂に「テーマを見つけて作りなさい」と何度も指導されたが私にはできなかつた。大佳さんはいまテーマを得たのではとおもつた。

“秋の暮”は秋の夕暮れ、“暮の秋”は晩秋の謂と歳時記には書かれてゐる。広辞苑では晩秋の謂もあると書かれてゐる。この句、一日のスパンで読むより“晩秋”といふ一年のスパンの中で読む方がふさはしいやうに思った。(喜孝)

街ピアノ色なき風の中に聴く

須賀敏子

街ピアノ、すなわちストリートピアノを秋の風の中に聴いたという句意です。鑑賞者もストリートピアノを聴く体験をしました。風とピアノの旋律が映え合う時間は一年の中でそう長くはないです。色なき風の中にピアノの旋律が流れるのは非常に心地よいです。(大佳)



鉛筆の句

「あを」俳句より

開戦日消しゴム鉛筆使ひきる 佐藤恭子

今は知らず、昔の子が最初に持つ筆記具といへば鉛筆であっただろう。なぜか「鉛筆箱」ではなく「筆箱」といつていた。その中には鉛筆・消しゴム・肥後守が入ってゐた。恭子さんは八月十五日に対し思ひの丈を書いては消したといふ。実際の行動から得



佐藤喜孝

た発想かもしれないが、行きつ戻りつおもひの丈をこのやうに表現されたのだらう。

恭子さんの幼少時は新潟市で過ごされた。東京の食糧難の事は知らなかったさうだ。これは羨ましかった。

鉛筆はあまりおいしいものではなかった。

春の雲むかし鉛筆舐めにけり 定梶じょう
鉛筆を舐める癖あり卒業す 篠田純子

地図帳と季寄せ鉛筆春炬燵 須賀敏子
春炬燵の卓上が楽しさう。山歩きか旅の計画を企ててゐるのか、それとも行った先を指で地図をなぞりながら、一句を詠まじつとしてゐるのかもされない。如何様にも読めるが、どう読んでも楽しいひとときが浮かんでくる。

鉛筆に残る噛み跡子供の日 森なほ子

子供の心の模様が鉛筆の噛み跡でつかかへる。「私の子供の時と同じだわ」と思つてゐるかもしれない。鉛筆の芯を舐めるより体に良いかもしれない。だが

子供のころ鉛筆を噛む癖もあつたが舐める癖もあつた。昔の鉛筆はなめて書くと黒さが増したように思ふが、今試してみたところ変化はなかつた。芯の素材が私らが子供の頃と今とは違ふからかもしれない。「むかし鉛筆舐めにけり」とあるから、作句時点ではもうなめてはゐないやうだ。「春の雲」がこの句に見事に収まつてゐる。

純子さんも「舐める癖あり卒業す」と見事にこの癖からも卒業された様子。
肥後守毎日長い夏休 佐藤竹僊

おぼろげな記憶に降るは牡丹雪 亀田虎童子

水仙のむかふの人をみてゐたる 佐藤 竹僊

朝日さし白湯ゆるゆると冬に入る 長崎 桂子

初雪をぺらと乗せたり浅間山 森 なほ子

村人は紅葉の中に暮らしをり

街道に千生り柿のこぼれさう 赤座 典子

焼藪の大き壺置く炭屋かな

橋桁の太きつららや遊覧船

義経の腰越の磯鳥渡る 秋川 泉



鯛焼をかかへ神父のいそいそと

新包丁試みに切る花梨の実 七郎衛門吉保

今朝の冬蝶のむくろの千代紙めく 篠田純子

今朝の冬元気な眉を引きませう

AIの描く水星のもみぢかな 篠田 大佳

ままならぬ日も有りてこそ柚子は黄に 須賀敏子

綿虫の只一匹を追いかけて

冬紅葉平らな時間過ごしをり 都築繁子

ひとり居の早めの夕餉冬菜漬





鉛筆ダコ — 秋川 泉

小学校入学時、父から名前入りのHBの鉛筆を贈ってもらい、とても嬉しかった。その後、進級するたびに名前入りのHB鉛筆を1ダースずつもらった。小学校高学年になり、友達の中でHや2Hの鉛筆が流行って、私もその仲間に入った。

Hや2Hは硬くて指が痛かったが、少し大人になった気分でそれを使った。それでか今も鉛筆ダコが指から消えない。今は、Bか2Bでないと指が耐えられないと云うのに……。

子供時代の私に云ってやりたい。「そんな硬い鉛筆ばかり使い続けると、太い指に大きなダコが張り付いて、一生美しい指の仲間入りができないよ！」と。

鉛筆 — 森なほ子

吟行用の句帳には、ゴルフに使う10センチ程の挟める鉛筆を愛用。芯が1センチくらいなのですぐに丸くなるが、書きなぐるにはちょうどよい。夫が持ち帰っては捨てるので、エゴのためということもある。引出しには常に10本くらい出番を待っているが、近頃はあまり吟行しないので、あまり減らないで貯まる一方だ。それでもゴルフができなくなった時のため、捨てられない。いや句ができなくなるのが先かも。

遊び心と鉛筆 — 篠田大佳

学生時代は、文房具に遊び心を注ぎたい年頃でした。小学生の頃は鉛筆の使用を強制され、理不尽に思っていました。大人になって、自由に筆記用具を選べるようになりましたが、大量の字を書く時には、鉛筆で書いた方が書き味がスムーズで、疲れません。鉛筆の長所に気付くのにかなりの時間を要しました。

鉛筆 — 篠田純子

四十年代半ば頃、気持の落ち込んでいた時期があった。その頃友人に誘われ、俳句会に伺い俳句の世界を知ることとなった。佐藤先生にせっかくだから明德稲荷の七座句会もどうですか、とご案内をいただき通い始めた。七座には、かつて中原淳一と仕事されていたと言っ、内藤悦子さんが来て居られた。何時も綺麗に削ったおろしたての鉛筆を3本、きちんとテーブルに置いて「さあやりましょう」という気構えを、私は感じていた。神田生まれでお酒も強く、江戸っ子気質。齒に衣着せぬ選評に、初心者の私はたじろいでした。さすが筆で仕事をされてきた女性は、格好いいなあと思ちファンになってしまった。



ゆらり

青空のゆらりと傾ぐ日向水
秋の昼ゆらりゆらりと飛行船
朝は納豆ゆらりゆらりと春寒し
夏の風邪ゆらりと終へる一仕事
踊の輪ゆらりゆうらり十三夜
夏の蝶ゆらりと戻る葉陰かな
櫓の軋みゆらりゆらりの花あやめ
寒風を受けてゆらりとユニホーム
暮るる海ゆらりと寄せる小春風
解体のゆらり降ろさる雲の峰
水澄むや飛驒古川の鯉ゆらり
林立の帆柱ゆらり春の昼
山藤の頼りて登りゆらりゆらり
葉柳のゆらりと触れてどっこ舟

揺られ

肉じゃがの湯気に揺られし顔と声
世が世なればと亜浪忌の宝仙寺
寒き世に小さき祝ぎごと有難し
人の世の情け舞台上傘雨の忌
愛憎はこの世でのこと盆の花
神世より泣く吾子しかと縁かな

赤座 典子
森山のりこ
堀内 一郎
赤座 典子
赤座 典子
赤座 典子
森 理和
須賀 敏子
鎌倉喜久恵
森 理和
須賀 敏子
石森 理和
赤座 典子
七郎衛門吉保

いつの世も左まはりに踊りの輪
たれかれのもう世に居ない星祭
夜釣火の闇にひとつはあの世めく
いまの世の安壽厨子王齋起
したたかにこの世を生きて冬薔薇
大夕焼あの世が透ける岬かな
人の世とは別とんぼが池の上空を
前の世の嘴をもてまんじゆしやげ
雷はげし世の中かくも暗きかな
臍の緒を切れこの世の今日月
いつの世や与謝野晶子の日向ぼこ
少子化の世に頼もしき冬芽かな
春の海浮き沈む世に棹をさす
混沌の世に生まれけり梅雨の蝶
いつの世も踏切に居る夏帽子
あたたかく冷たき世なり猫じやらし
政この世の不思議数からし
この世にて遇ひし人たち彼岸花
世の平安海鼠はふかく考へる
一葉も足袋を繕ふ世のありき
世の滅びはじまりしかと花八手
誹諧や此の世の外へ出るあそび
儼の世のテレビで怒る人を消す

篠田 純子
田中 藤穂
関口 ゆき
佐藤 喜孝
栢森 定男
関口 ゆき
高橋 信佑
佐藤 喜孝
早崎 泰江
東 亜 未
赤座 典子
赤座 典子
堀内 一郎
須賀 敏子
赤座 典子
堀内 一郎
芝宮須磨子
田中 藤穂
定梶 じょう
須賀 敏子
山莊 慶子
佐藤 喜孝
佐藤 喜孝

柞の実わからぬ言葉世に増えて
十年後はこの世になしと決めて冬
御降りや世の中なべて治むべく
雪霏霏とこの世の音を消しつ積む
人の世は眞直ぐでない麦青む
釈迦生れし世の遠々し花祭
仏心の廃れゆく世の花祭
百才も夢でない世や雲の峰
かなかなをききてあの世へ旅立ちし
いつの世のだからかは知らず螢文字
賀状一枚暮にこの世を去りし人
先の世にたちし人にも箱の膳
たつぷりとこの世見せたる桜かな
自転車を漕ぐ弟にこの世の春
春の宵枝を鳴らさぬ世を願ふ
たんぼぼの絮吹く不透明な世へ
あの世この世一緒に願ふ梅雨の寺
唱名があこの世この世を秋彼岸
満月やこの世の有様不透明
いつの世も抗しきれぬもの冬深む
隠り世の生葉屋におく榎櫃の実
世にすねて花壇を壊す春愁ひ
衣被世の少子化をとどめたし

田中 藤穂
堀内 一郎
東 亜 未
木村茂登子
芝宮須磨子
田中 藤穂
田中 藤穂
木村茂登子
田中 藤穂
佐藤 喜孝
堀内 一郎
鎌倉喜久恵
堀内 一郎
堀内 一郎
芝 尚子
芝宮須磨子
森山のりこ
芝宮須磨子
芝宮須磨子
芝宮須磨子
芝宮須磨子
長崎 恭子
佐藤 喜孝
田中 藤穂

露の世のひとに褒貶びつこの犬
嘆かはし事多すぎる世除夜の鐘
花の寺戦国の世の連判状
仮の世の夕刊を読む太宰の忌
暑き日の銭湯ありて良き浮き世
天然水買ふ世となりぬ終戦日
相聞のひとつやふたつ假の世ぞ
假の世に蒲團を延べてこの世とす
酒のめぬで通した世渡り葉鶏頭
仮の世にまた糸瓜忌のめぐり来る
仮の世をどんぐりころころいとこ会
仮の世をせっせつせつせと生身魂
仮の世の年寄の日の祝金
仮の世の終の棲家の掛布団
一茶忌の仮の世ながらさりながら
音立てて幻の世へ木の実落つ
口ポットもをどる世となり十二月
現役の世にさわがしき五月かな
次の世にすることにして籐寝椅子
空ろな世噴水しかと天を指す
白玉や昭和良き世か悪しき世か
夏衣この世斜めに見て過ごす
仮の世に棲みて松茸御飯かな

定梶 じょう
長崎 桂子
田中 藤穂
竹内 弘子
遠藤 実
芝 尚子
佐藤 喜孝
佐藤 喜孝
遠藤 実
竹内 弘子
藤野 寿子
藤野 寿子
田中 藤穂
篠田 純子
定梶 じょう
渡邊 友七
芝 尚子
木村茂登子
遠藤 実
堀内 一郎
田中 藤穂
芝 尚子
芝 尚子

あとがき

「あを俳句」鑑賞文

ながく篠田純子さん・篠田大佳さんに執筆いただいた。感謝あるのみです。一月作品より篠田純子さんに代わり森なほ子さんにお願ひしました。

短文依頼「うち田のうさぎ」

「ここまで歩いてくる間に、町の上に残っていた光は姿を消し、かわりに空が木苺の実のように黄ばみはじめていた。まだ娼家に人があつまる時刻ではないが、それでも家々の前には、手を突っこんだ袖を胸に抱いた、白い顔の女たちが、人待ち顔に立っていた。」(藤沢周平『消えた女』)

八百屋や果物屋に並んでゐるのを見たことのない「木苺」の実が好きである。見つけて妻に果実酒を作ってもらったこともあった。その木苺の実が藤沢周平の小説の中でいきいきと登場してゐるのを知り驚き、そしてうれしくなった。ありありと夕空の色が脳裡によみがえった。

“夕”は多くのいひ表し方がある。木枯さんの句集

“夕さり”もさう、かはたれどき・宵の口・マジックアワー……。みな魅力ある言葉だ。今は独り飲み会の始まるこの時間帯が好き、いや待ってゐる。皆様は一日の内で朝が好きですか、昼ですか夜ですか。

前号正誤

16頁鑑賞句

曼殊沙華姉は明るく物忘れ 須賀敏子

(喜孝)

二〇二三年二月号

発行日 二月二十日

発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

電話 090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／須賀忠男・福井美佐子・テイリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)